

阿部珠理先生のご逝去を悼む

In Memory of Dr. Juri Abe

佐藤 円
SATO Madoka

いつも生気に満ちあふれていた阿部珠理先生がこんなにも早くご逝去なされるとは、誰が想像していたであろう。1年前に突然その連絡を受けたときもにわかに信じられず、ご葬儀に参列してもまだ現実感がなく、いまこうして先生を追悼する文章を書いている、依然としてなにやら釈然としない感覚にとらわれている。

先生と初めてお目にかかったのは、確か先生が福岡にある香蘭女子短期大学から立教大学へ移ってこられた1989年のことだったと思う。そのころの私は、アメリカ先住民史研究を志して立教大学の大学院に進学したものの、自分に自信が持てなかったため、修士課程を終えてもすぐには博士課程に進学する気持ちになれず、この先どのように生きていこうかと迷いながら、それでも週一回だけはこっそり大学院のゼミに参加していたという状況にあった。ある日、私を幽霊ゼミ生として受け入れてくださっていた恩師の故富田虎男先生が「最近立教にアメリカ先住民研究者が赴任してきたから紹介しよう」とおっしゃり、ゼミが終わったあとに夜学と称して通っていた江古田の居酒屋「唐変木」で阿部先生にお目にかかったと記憶している。当時の阿部先生はまだ30代後半で、教師として母校の立教大学に戻ってこられたことを喜び、非常にはつらつとされていた。なによりも私が驚いたのは、初対面の私に対して、「どんなことに興味があるの」「なにを研究しているの」と矢継ぎ早に、そして単刀直入に質問されたことだった。これから研究の世界に戻るのか、それとも異なる道を歩むのか、迷いに迷っていた私は先生の勢いにたじろぎ、明確に答えられたのか記憶は定かではない。それ以来ずっと私は阿部先生に圧倒されっぱなしであったが、私などとは異なり、どんなときも先生には研究を行うことに対する迷いなどなかった。

結局その後私は30歳を過ぎて博士課程に戻り、学問の世界で阿部先生とのお付き合いが続いた。先生はいつでも精力的に研究に取り組み、常に日本におけるアメリカ先住民研究の牽引役となってこられた。最初のご著書である『アメリカ先住民の精神世界』（1994年）から一貫して、現地におけるフィールドワークで得られた知見を織り交ぜて、アメリカ先住民の抱える厳しい現実や、植民地主義によって傷つけられながらも継承されてきた文化の豊かさについて、時には学問的に、そして時には一般読者にも理解できるようなやわらかい語り口で、多くの著書、論文、テキスト、エッセイを発表されてきた。それらの業績から、後に研究者になった者も含めてどれくらい多くの人がアメリカ先住民に出会い、彼らの世界に誘われたことだろう。私も同業者として、少しでも多くの人にアメリカ先住民について関心を持ってもらおうと知識の普及に努めてきたつもりであるが、とても先生にはかなわない。それどころか、相変わらず自分がどこかでアメリカ先住民について紹介しなければいけないときには、先生のご著書『アメリカ先住民——民族再生にむけて』（2005年）や先生が中心となって編まれた『アメリカ先住民を知るための62章』（2016年）を頼りにしている。それは、史料や文献に埋没しがちな歴史学が本業の私に比べて圧倒的に勝っている阿部先生の現地体験と、それによって得られた知識が、いまを生きるアメリカ先住民を伝える際に不可欠であるからに他ならない。最近遅まきながら現地の先住民社会に入り込み、試行錯誤をしつつ研究調査をしている身にとって、改めて先生が行ってきたフィールドワークの重要性とその難しさに気づかされている。

阿部先生の日本におけるアメリカ先住民研究の認知度を引き上げようとする努力は、学界においてはさらに際立っていた。私も所属しているアメリカ学会では、常任理事や国際委員会委員長などを歴任されるなかで、精力的にアメリカからドナルド・フィキシコ（Donald Fixico）やフィリップ・J・デロリア（Philip J. Deloria）などの高名なアメリカ先住民研究者を日本に招き、専門家向けのワークショップや一般向けの講演会を主催された。阿部先生が学会において重責を担われ、積極的にアメリカ先住民研究に関わる企画を立ち上げてくださらなかったら、私を含め多くの研究者は、日本にいながらにしてアメリカの第一線級の研究者と交流し、直接学ぶ機会を得られな

かったであろう。

研究者の招聘に加えて阿部先生は、アメリカ学会内にアメリカ先住民研究分科会も立ち上げられた。日本ではそれまで歴史学、人類学、文学、社会学、心理学、法学など異なる分野でばらばらに、多くは個人を単位としてアメリカ先住民研究が行われてきたが、それを一つにまとめ、研究者相互の学際的な交流の場をつくるというのが分科会設立の趣旨であった。2006年に発足した分科会は、いまや各分野のアメリカ先住民研究者がそれぞれの最新の研究を報告し、活発に意見を交換しあう場となっている。阿部先生の人と人を結びつける力には、いまさらながら感服すると同時に深く感謝している。

阿部先生は後進の育成にも熱心だった。少しでも日本におけるアメリカ先住民研究の裾野を広げようと、若手研究者が学界で活躍する機会が得られるようにと常に腐心されていた。先生は若手の業績の出版助成に尽力したり、彼らが様々な媒体に文章を書く機会や学会で報告する機会をつくったり、彼らに非常勤講師などの仕事の斡旋をしたりと様々な援助をされてきた。表立ってそのようなことをしていると一言わずに、いろいろと口添えされたこともあったので、現在活躍している研究者の多くも、知らない間に先生に助けられていたことがあったと思う。私は横で見えていて、その善意が相手に充分伝わっていないと感じることもときにはあったが、先生の若手研究者への熱心な援助には強い信念があり、決してお止めにはならなかった。その背景には、以下のような先生の個人的な経験があった。

阿部先生は、立教大学を卒業したあとすぐには大学院に進まなかった。その間の事情について、私は2017年に行われた先生の最終講義でお話を伺うまでは詳しく知らなかったが、先生は大学卒業後数年にわたって大手企業の会社員や英語塾の教師などをされていた。特に英語塾の教師をしている間に、資格のないまま仕事を続けることを潔しとせず、応用言語学を学ぶために進学を決意され、UCLAの大学院に進まれた。そのアメリカ留学中に偶然アメリカ先住民研究と出会われたのであるが、留学を終え日本に戻ってこられてから、前述した通りご出身の福岡にある香蘭女子短期大学に就職され、最終的に母校の立教大学に移ってこられた。先生は最終講義でもおっしゃられていたが、アメリカから帰国したあとの就職活動中に、日本で大学

院を出ておらず、コネクションがない人間にとって、日本の大学に就職することがいかに難しいものであるかを味わわれた。このつらい経験があったからこそ、後ろ盾のない若手研究者に対して、常に救いの手を差し伸べようとされてきたのである。

阿部先生からすれば、私のように日本におけるアメリカ先住民研究の第一人者的存在であった富田先生の庇護のもとにいる者は、苦勞知らずに思えたのであろう。30代の終わりになってようやく専任職にありついたら先生にご報告したところ、「よかったわね。富田先生から紹介してもらったの?」と即座に言われてしまったことは忘れられない。実際にはそうではなかったのであるが、先生の言葉にいささかショックを覚えつつも、そのように言われて初めて、自分がどれほど富田先生から守られてきたのかに気がついた。世間知らずと言えよそれまでであるが、当時私が大学の非常勤講師の仕事をしていただく機会がそれなりにあったのも、富田先生に対する社会的信用があったことそのことであった。これが阿部先生の率直な言葉から私が学んだことである。先生にはときにその率直さで相手に誤解を与えるきらいがあったが、先生の言葉には悪意はない。受け手の側がどう解釈するかの問題であった。

阿部先生と私は年齢が10歳近く離れているにもかかわらず、富田先生の弟子であることから一目置いてくださって、いつも対等に接してくださった。とても先生にはかなわないと思いつつも、対等に接して下さることをまた励みともしてきた。そのように背中を押して下さる存在がもういらっしやらないのかと思うと、改めて先生の存在の大きさを実感する。残された者として、阿部先生が心血を注いで育ててこられたアメリカ先住民研究という分野を、これからも発展させていくという重い課題と向き合っていかなければならない。とても先生の代わりは務まらないが、先生のおかげで出会うことができた他のアメリカ先住民研究者の助力を得ながら、微力ながら努力を続けていきたいと思う。

阿部先生、本当にありがとうございました。そしてお疲れ様でした。